

# 玄界島の海底陶磁

塩屋勝利

## 一、はじめに

福岡（博多）湾の入口に浮かぶ玄界島の考古学上の知見は、湾内の能古島や湾頭の志賀島に比べてこれまで皆無であり、島に生きる人々の伝承や古老の記憶からも伺うことができない。一九七八年一月一五・一六日に当館が実施した玄界島史料調査においても考古学的成果は得られず、考古学部門を担当した柳沢一男氏はその報告(1)の中で、

「地図の上では、玄界島は絶海の孤島というべくもなく、まさに

沿岸に散在する島嶼の一つである。（中略）こうした沿岸性の島嶼に、古く縄文・弥生時代以降の遺跡が存在することは、日本の各地で認められる現象なのだが、これまで本島での遺跡・遺物の発見例

は知られていない。今回の資料調査でも考古資料に触ることはできなかった。それは本島が花崗岩・玄武岩で形成された急峻な丘陵部からなり、海岸線とのあいだに平野部をみないため定住生活が困難であったためかもしれない。仮にそうした地形上の制約があるにせよ、縄文時代以降の航海技術の発達(中略)と、本島の海上位置からみれば、当然古代人の航海における一道標の役割を担い、かつ、その足跡がしるされたであろうことは充分に予想される。」

と述べ、今後の精密な分布調査による玄界島の原始・古代の姿を明らかにする必要性を指摘している。

しかしながらこの調査では、家伝のものを含め、海中から採集された陶磁器についても注意され、玉川桂氏所蔵の唐津焼皿、宮本一郎氏所蔵の唐津焼壺、小西徳平氏所蔵の唐津焼大壺が報告されてい

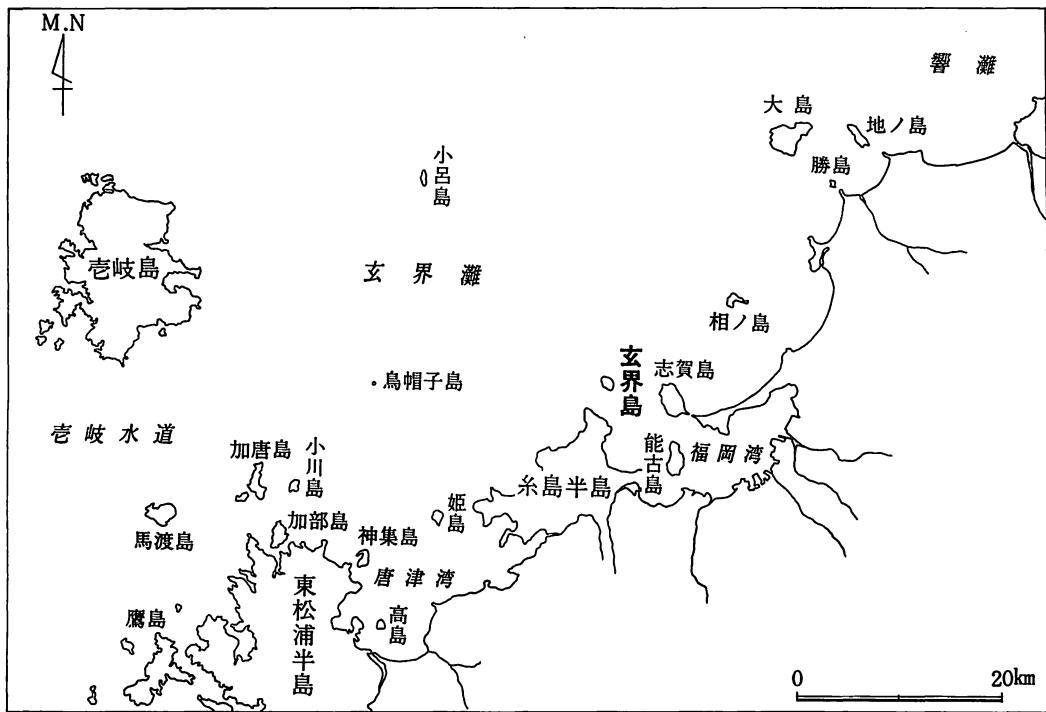


Fig. 1 玄界島位置図

る。これらを総括して柳沢氏は、

「本島の南数百メートル、通称タケノシリ沖の七〇八メートルの海底で採集され、現在でも時折破片が採れるという高台付の碗と杯がある。杯は十点ほどあり、すべて同一の器形・胎土・釉調を呈する。やや粗い砂粒を含む胎土に、体上部に施釉する。青と黄褐色の透明度の高い釉で見込みに三、四ヶ所の目跡を残す。畠付部は霧胎である。(中略)こうした器形・釉調からみて、海中出土品は唐津・黄唐津と呼ばれる唐津焼の製品と思われる。このことは、今から一五〇年ほど前に唐津から博多に向う船が、その地点で難破・沈没したという古老のいい伝えに符合する。」

とし、江戸末期の廻船積載品である可能性を示唆している。

この調査の後、同一海域から採集された唐津焼皿、碗、壺が浦田小五郎氏によって寄贈され<sup>(2)</sup>、さらには一九八一年度より当館の民俗資料調査収集委員に委嘱された玉川桂氏の海士活動で採集された資料が蓄積されるようになった。その中で、一九八四年五月、玉川氏が採集された龍泉窯青磁碗はわれわれを驚かせるに十分であり、当該海域の水中考古学的調査の必要性を痛感させたのである。しかしながら、日本の水中考古学、とりわけ九州の水中考古学は、潜水調査技術の開発はもとより組織体制が皆無であり、いわば学問的市民権の外にある。このため、かつて米国の水中考古学を現地で学んだ九州大学考古学研究室研究生の林田憲三氏と連絡をとり、まず当該海域の分布調査を少人数で実施する計画を立て、福岡市教委文化課の池崎謙一氏との三名で潜水調査を実施することになった。

調査は一九八四年八月四～五日の二日間実施したが、定期船の時間制約上、実質的にはまる一日ということになる。なお持参した潜水用具は一式であり、まさに水中考古学以前といふべき調査であったことを断わっておきたい。調査参加者は次のとおりである。

池崎譲二（福岡市教育委員会文化課）

林田憲三（九州大学考古学研究室研究生）

玉川 桂（福岡市立歴史資料館民俗資料調査  
収集委員）

玉川利久（玄界島漁業協同組合）

塙屋勝利（福岡市立歴史資料館）

なお玉川氏父子には、宿舎の手配とともに、二日間にわたって船外機付小型船の提供および操縦までお世話になった。厚く感謝を申し上げる次第である。

## 一、海底陶磁の採集調査

すでに述べたように、玄界島は福岡（博多）湾の入口に位置し、玄界灘の中にある（Fig. 1）。糸島半島先端の西浦崎から約二・五Km、志賀島北端から約四・八Kmを距て、博多港からの直線距離は約一五・五Kmである。花崗岩と玄武岩か

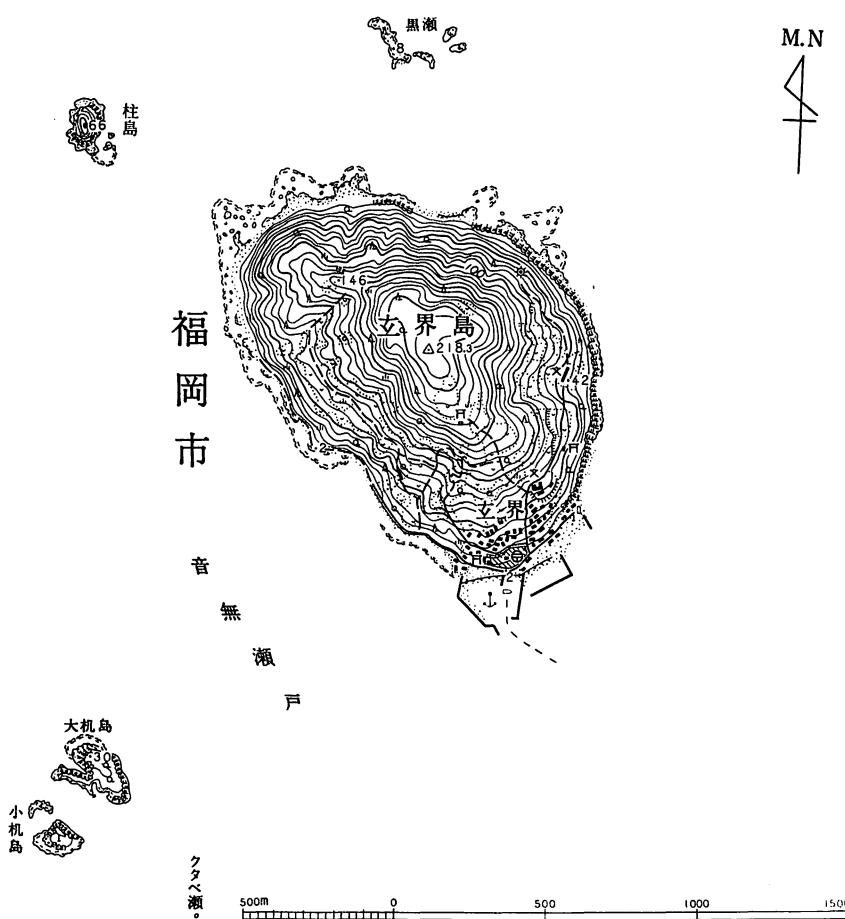


Fig. 2 玄界島地形図

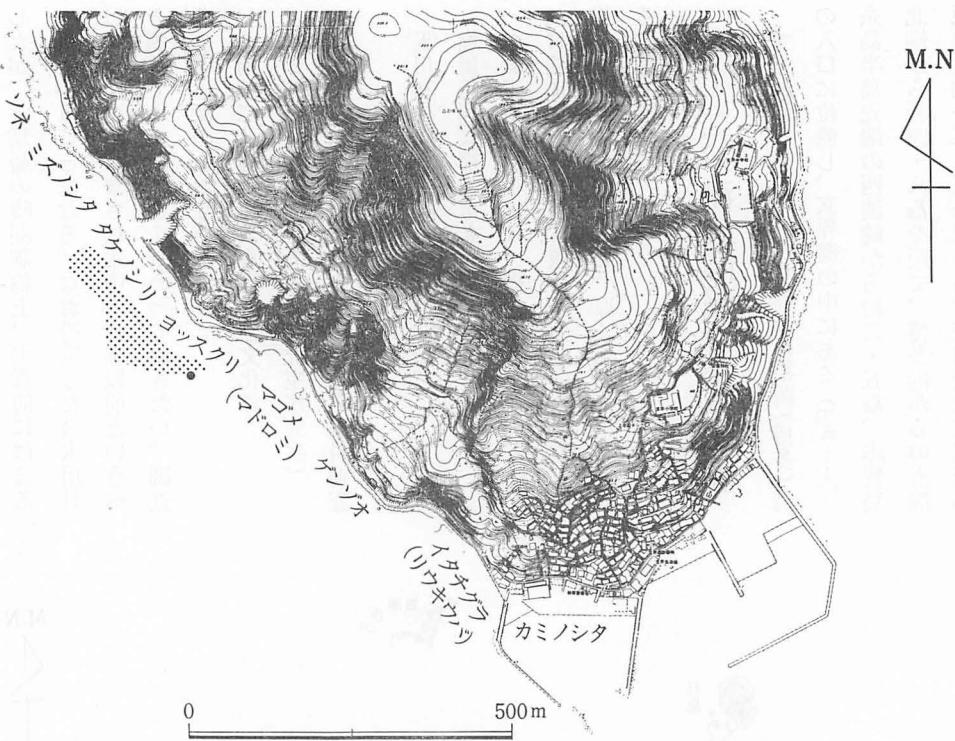


Fig. 3 玄界島海底陶磁採集地点図 (アミ目の範囲)

ら成る島で、鉢を伏せたような急峻な山島を呈し、長さ約一・三Km、幅〇・五Km、全周四Kmを測る (Fig. 2)。南端部に小規模の砂浜の形成がみられるものの、島の周囲はほとんどが岩礁である。このため、全域がアワビ、サザエ、ウニの好漁場であり、潜水漁法も盛んである。したがって、海底遺物もこれまで発見されてきたのである。しかしながら、これらの遺物は全島の周囲で採集されるわけではなく、南端部のカミノシタ、イタチグラ (リュウキュウバ)、ゲンゾウ、マゴメ (マドロミ)、ヨツスクリ、タケノシリ、ミズノシタ、ソネと呼ばれる島西南部の海域であり (Fig. 3)、これまでの発見はヨツスグリからタケノシリの間の海域に集中している。

今回の潜水調査は、従来のデータと日程の制約により、マゴメ、ヨツスグリ、タケノシリまでの間約四〇〇m、水深三七八mの範囲で分布調査を行った。その結果、玉川氏の龍泉窯青磁碗採集地点 (黒点印) を南限とし、タケノシリとミズノシタとの境までの間約二五〇m、水深三七八mの間に遺物が分布していることがわかった。その分布状況は一様ではなく、集中的に認められる地点が群在するものである。また、後述するように、陶器が二三個重なった状態で見つかる例もあった。これらの遺物の分布状況は、陸上におけるそれとは異なり、潮流の影響や潜水漁業による人為的な移動など、原位置をとどめている可能性はほとんど無いと言えよう。

### 三、採集遺物

一九八四年五月に、玉川氏が採集して当館に寄贈した玄界島の海

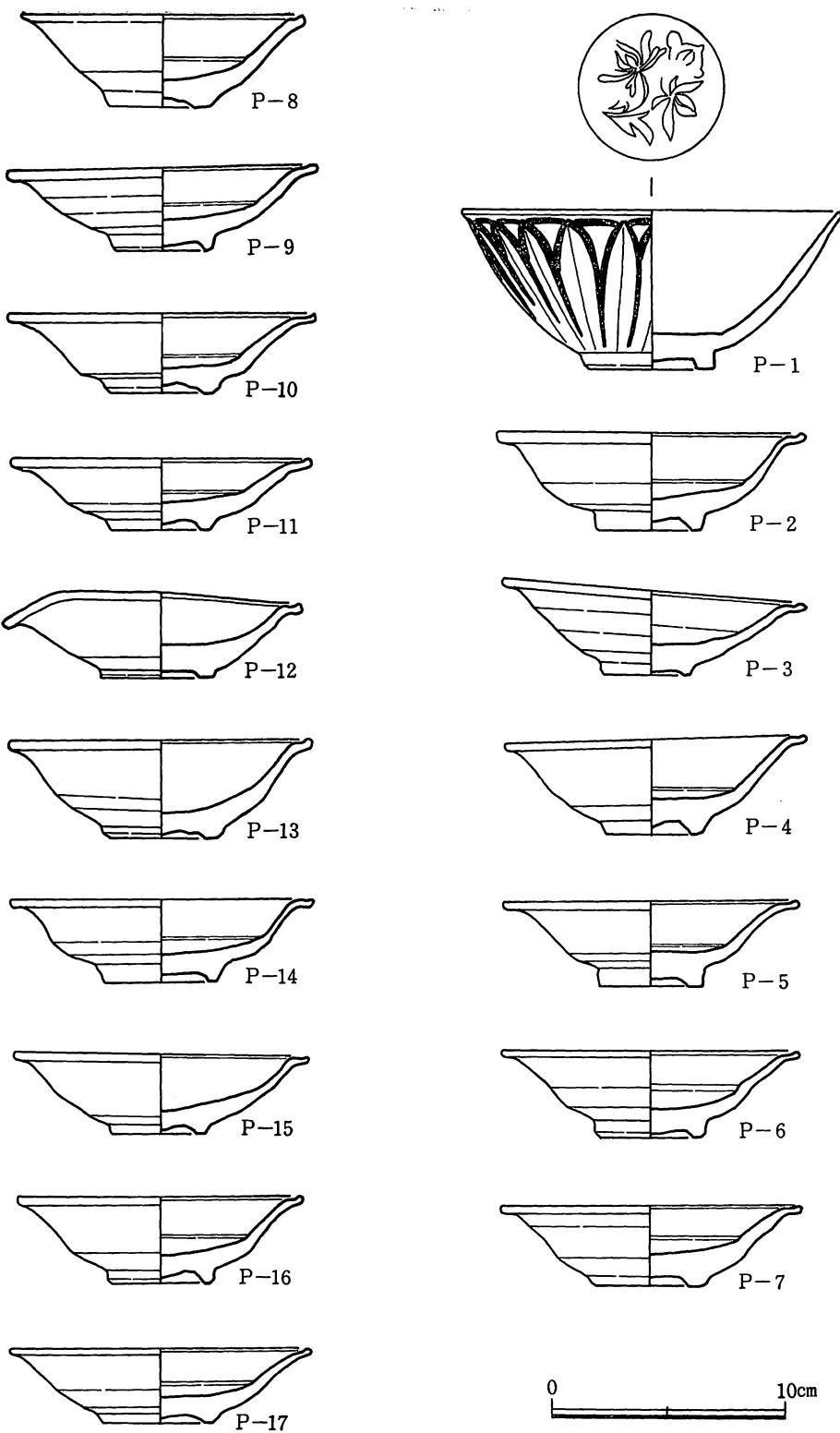


Fig. 4 玄界島海底陶磁実測図 (I)

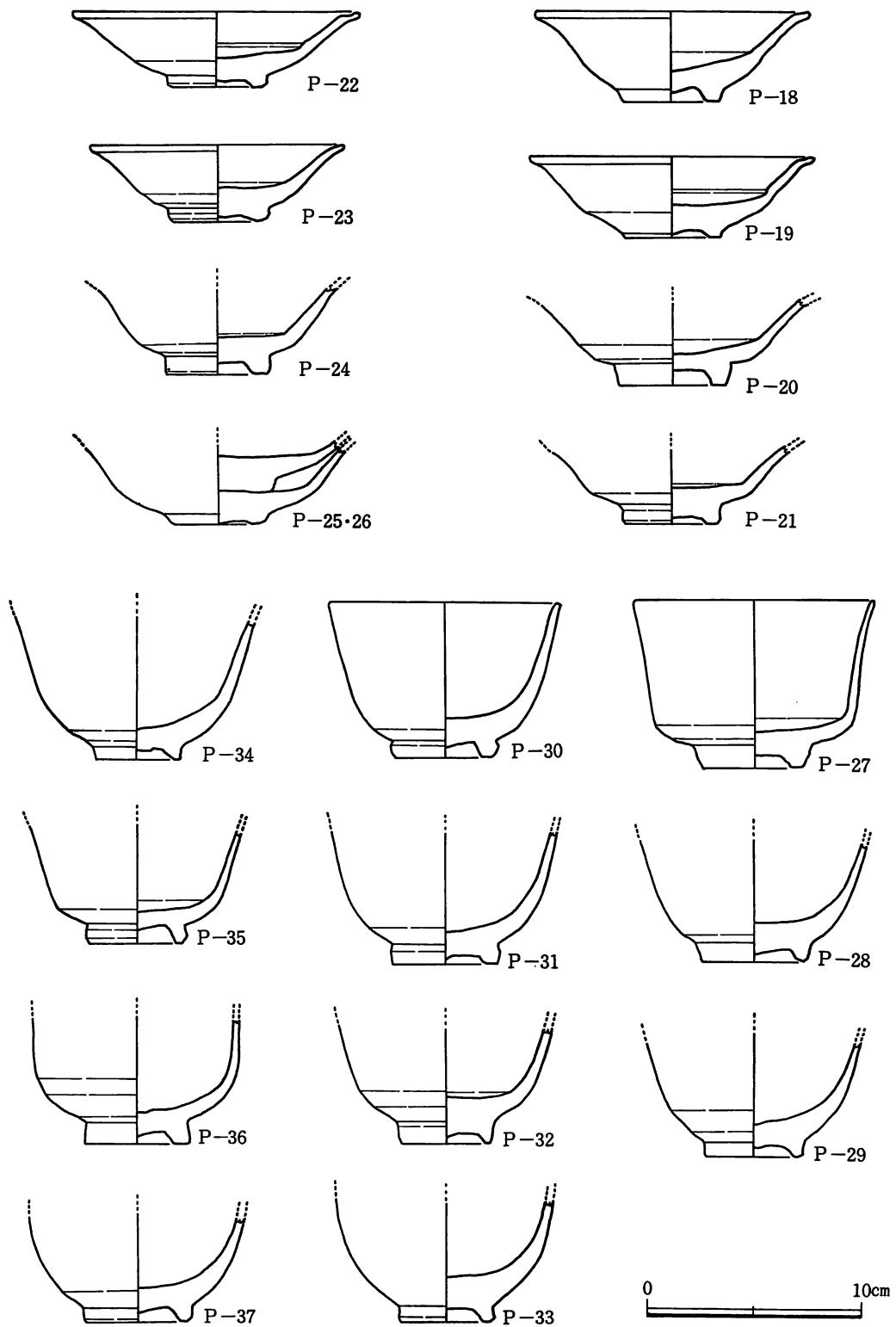


Fig. 5 玄界島海底陶磁実測図 (II)

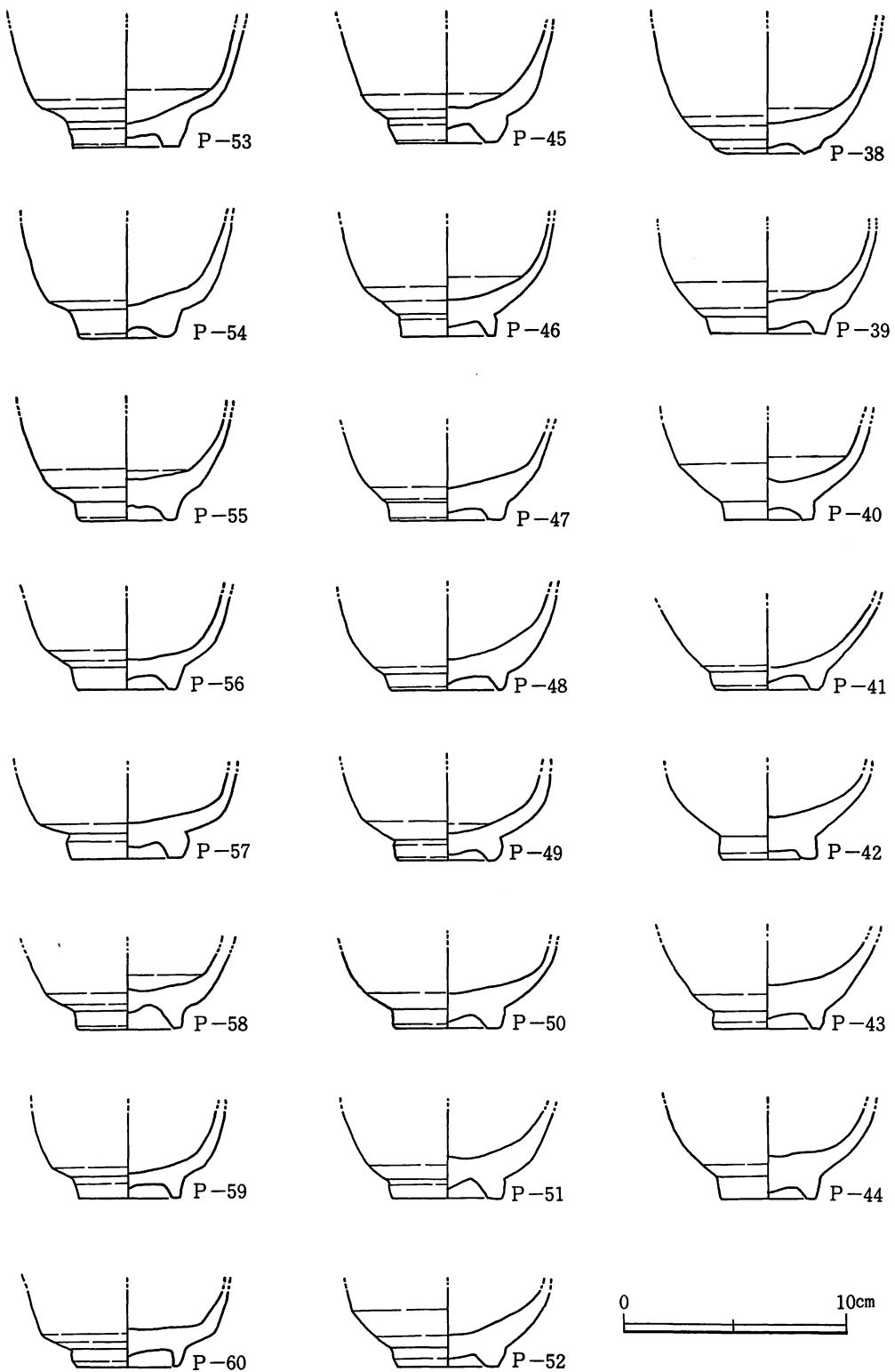


Fig. 6 玄界島海底陶磁実測図 (III)

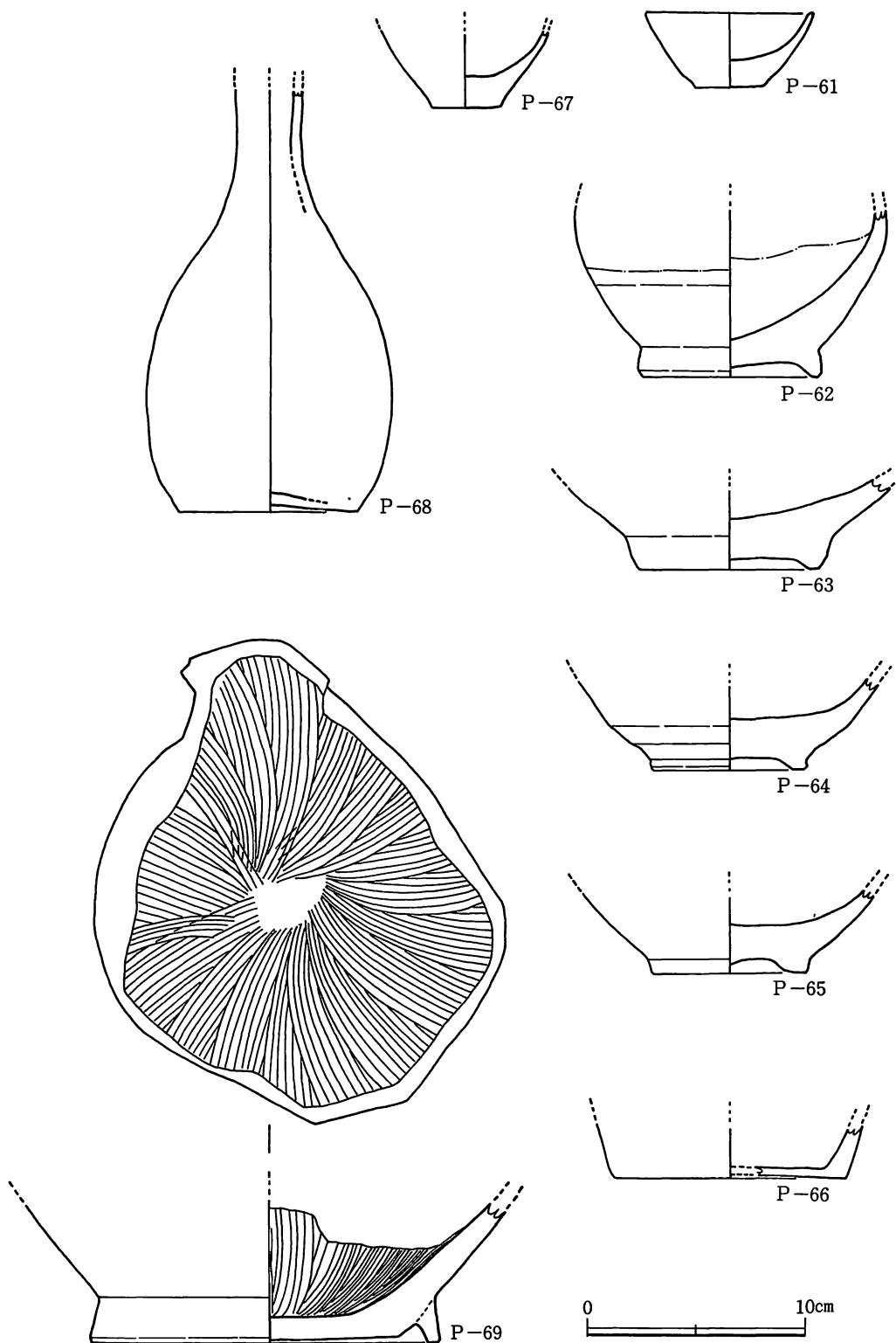


Fig. 7 玄界島海底陶磁実測図 (IV)

別表 玄界島海底陶磁観察表

(单位:  
cm)



摺鉢	瓶	鉢	壺	杯	
F i g 七 P L 四 P 六 九	F i g 七 P L 四 P 六 八 七	F i g 七 P L 四 P 六 五 四	F i g 七 P L 四 P 六 三	F i g 七 P L 四 P 六 二	“ “
/	/ /	/ / /	/	/ 七 · 四	/ / /
/	/ /	/ / /	/	/ 三 · 四	/ / /
一 五 · 八 精良 · 黄 褐色	一 八 · 二 精良 · 灰色	八 · 四 精良 · 茶褐色 七 · ○ · 灰色 · 淡茶色	八 · ○ 精良 · 茶褐色	三 · 一 “ · ” 精良 · 灰褐色	四 · 四 · 六 “ · ” 淡灰色
”	” 普 通	” 普 通	” 普 通	” 普 通	” ”
黒褐色の釉	黒褐色の釉	地肌の色	黒褐色の釉	黒綠色の釉	”
貼付け高台の底部、十本単位の櫛目を内底から放射状に施す。	なで肩の体部、底は上げ底を呈す。	高台を低く厚く削り出す。鉢と考えられるが、全体の器形は不明である。	削り出し高台の底部から球形の胸部をつくる。	き出している。	”
?	— 唐 津	— 唐 津	唐 津	唐 津	”
			釉が剝落。	施釉は体部下半部まで。	”

底陶磁は、龍泉窯青磁碗一点、唐津皿一〇点、唐津碗一九点、唐津

査で採集した遺物は、唐津皿三二点、杯三点、碗四一点、摺鉢二点、朝鮮唐津壺五点、唐津鉄袖鉢三点、碗小破片五三点、皿の小破片二四点、近代染付壺片一点、土錘一点である。海底採集品のため破碎されているものが多く、次に一括して代表的なものを紹介する。

龍泉窯・青磁碗 (P-1、Fig. -4)

口径一六・四cm、器高六・八cmを測り、器の三分の二を残す。胎土は精緻で灰色を呈し、焼成は堅緻である。淡い青緑色の釉が高台外面まで施され、体部外面に蓮弁文を陽刻し、内底に草花文を陰刻する。中国浙江省龍泉窯青磁で、一三世紀代の製品である。福岡湾

周辺の海底からの出土は初めてである。

唐津・皿 (P-2~P-26)  
Fig. 1-4~5

削り出し高台をもつ皿で、口縁端を外反させ、内側に稜をつくる溝縁の皿である。内底と体部の境に段をつくり、内底の三ヶ所に砂目が残るものが多。カキやフジツボの付着が著しく、海水に洗われて釉の剥落が激しい。重なったままのもの（P-25・26）、器高が安定しないもの（P-3・4）、体部がいびつなもの（P-12）が認められる。口径が一・六cm～一三・〇cm、器高が三・二cm～四・二cmの間におさまり、丸く深みをもつもの（P-13）、浅く外彎が著しいもの（P-17）など形能的変化が著しい。高台の削り出しも斜めに鋭く削るもの（P-2）、浅く太く削るもの（P-13）、高く削り出す

もの (P-5) などの変化がある。

これらの溝縁皿は、肥前陶磁のII-a期に属し、一七世紀初頭(3)前半期に位置づけられる。

唐津・茶碗 (P-27~P-60, Fig. 5~6)

破碎が著しく全体の形状を知り得るものは少ないが、採集固体数が最も多い器種である。カキやフジツボの付着、海水による釉薬の剥落などで、釉調や絵付けの有無などの観察が困難である。皿と同様に、二~三個が重なった状態で採集されたものもあり、船の積荷であつた可能性が強い。

平坦な底部から体部が直口して外彎氣味に起ち上がり、筒茶碗と呼ばれるものに近いもの (P-27)、ゆるやかなカーブをなす底部から内彎氣味に起ち上がるも (P-30)、やや平坦な底部から内彎して直口するもの (P-36) などの形態差があるものの、圧倒的に後二者の個体数が多い。底部から体部までの破片が多く、全体の法量を示し得るものは極少であるが、おおむね口径が一一cm前後、器高が七cm前後になるものと考えられる。高台の削り出しは、厚く斜めに削り畠付が狭く斜めとなるものが多い。釉調は灰緑色を基調とし、底部外面まで施釉されている。

これらの特徴から、これらの茶碗は肥前陶磁II-a期に属し、皿と同じく一七世紀初頭(3)前半期に位置づけられよう。

唐津・杯 (P-61~62, Fig. 1~7)

P-61は底径三・〇cm、口径七・四cm、器高三・四cmを測る。P-62は底径三・一cmで、器高はP-61より高い。厚い底部は糸切り

離しの平底である。灰緑色の釉が施されている。これらの杯も一七世紀初頭(3)前半期のものと考えられる。

唐津・壺 (P-63, Fig. 1~7)

削り出し高台をもつ壺の体部破片である。黒褐色の鉄釉が胴部下半まで施されている。この壺も一七世紀初頭(3)前半期のものと考えられる。

唐津・鉢 (P-64~P-66, Fig. 1~7)

太く浅く削り出した高台をもつ鉢の底部片で、海水のため釉の剥落が著しいが、黒褐色の釉が部分的に残っている。前者と同年代と考えられる。

唐津・瓶 (P-67~P-68, Fig. 1~7)

P-67は底部の破片、P-68は頸部途中までの完存品である。底径の違いから器形は必ずしも同一とは考えられないが、上げ底を呈す共通性が認められる。両者ともに黒褐色の鉄釉が施され、P-68はいわゆる朝鮮唐津と呼ばれるもので、これも一七世紀初頭(3)前半期のものであろう。

摺鉢 (P-69, Fig. 1~7)

底部の破片で、胎土は精良、黄褐色を呈す。磨耗が著しいが、黒褐色の釉が部分的に残っている。この摺鉢のおろし目は、一〇本単位の櫛状用具で内底中央からやや右廻りの放射状にすき間なく施されている。また、外底は平坦な糸切底であるが、体部最下位に粘土帶を貼り付け高台をつくっているのが特徴的である。おろし目の形状から一七(3)一八世紀の摺鉢と考えられるが、この時期の唐津焼摺



Fig. 8 玄界島周辺の海底地形

鉢の底部に貼付高台をもつ例を知り得ない。備前焼あるいは高取焼であるうか。

#### 四、おわりに

以上述べてきたように、玄界島の西南部の長さ約二五〇m、水深三七八mの範囲には、近世初期の唐津焼を中心として、多量の陶磁器が散在していることが明らかとなつた。一三世紀代の龍泉窯青磁碗に類する中国製陶磁器を一点たりとも採集できなかつたことや摺鉢の問題など、海上からの投棄品の可能性が強いものもあるが、多量の唐津焼の採集は、廻船の積荷品であつたことを示すものであり、付近に沈没船が存在することを示唆するものと言えよう。

ここで玄界島と西浦間の海底地形を見てみよう (fig. 1-8)。この海域は、博多から唐津・平戸、壱岐・対馬航路上にあり、原始・古代においてもそうであつたことが想定されるのである。この海域のほぼ中央には大机島と小机島の二島の溶岩成の島があり、水深五m以内のコクタベ瀬、クタベ瀬がある。これらの地形と潮流の変化、風向と風力などにより、海上航行の難所となつており、つい最近でも博多・平戸・五島航路のフェリーが座礁事故を起こしている。操船技術が未発達な原始・古代や、耐久性に乏しい廻船の時代にはなおさらのこと、数多くの難破船があつたことは十分に想像できよう。海底地形から想定すると、玄界島西南部にのびるマイナス10mの等深線から外側に難破船の存在する可能性を指摘することができないだろうか。

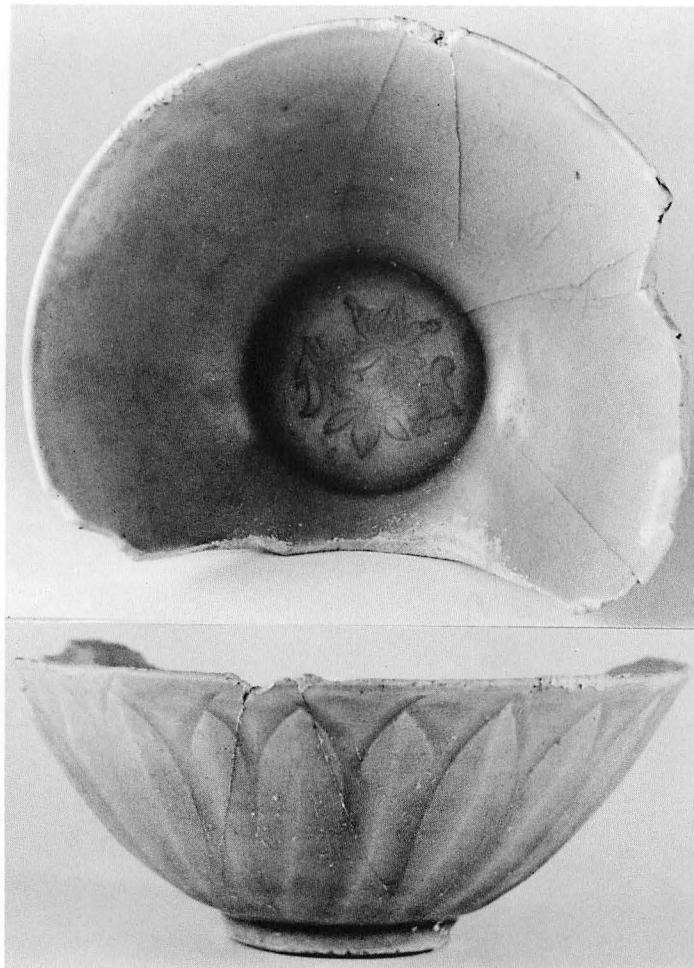
福岡（博多）湾を前面に控えた福岡平野周辺は、原始～中世に至る対外交渉を示す遺跡の宝庫である。けれども、交渉を具体的に担つた船と船乗り達の活動を示す遺跡の調査は皆無であり、博多湾周辺の本格的な水中考古学的調査が待たれると言えよう。

本稿を終えるにあたり、調査でたいへんお世話になった玄界島漁協組合長井上惣吉、玄界島公民館主事中村謙一郎、玉川桂、玉川利久の各氏に厚くお礼を申し上げる。また、九州陶磁文化館大橋康二氏には陶磁器について御教示を受けた。厚く感謝申し上げる。

#### 註

1. 玄界島史資料調査概報 福岡市立歴史資料館図録第五集 福岡市立歴史資料館 一九七九 福岡。
2. 福岡市立歴史資料館年報No. 10 福岡市立歴史資料館 一九八一 福岡。
3. 北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁 佐賀県立九州陶磁文化館 一九八四 有田。

本稿は調査を担当した池崎譲二、林田憲三と共同執筆すべきところであったが、本書の性格上、全ての文責は塙屋が負うものである。なお、遺物の実測・写真撮影、挿図のトレースに大峯佳之氏の協力を得た。記して感謝を申し上げる。



P - 1



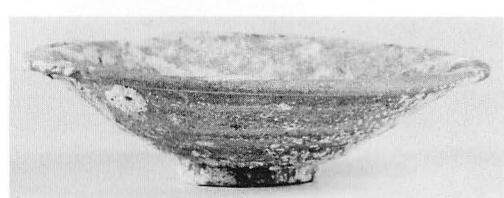
P - 4



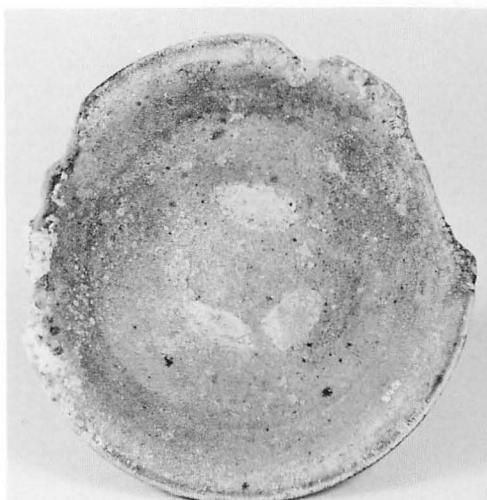
P - 2



P - 8



P - 3



P-9



P-10



P-15



P-25(上)·P-26(下)



P-27



P-12



P-13

PL.3



P-31



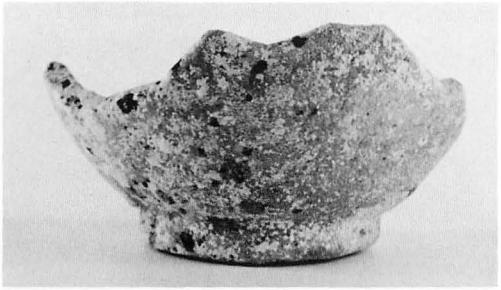
P-30



P-32



P-35



P-37



P-28



P-45



P-29



P - 61



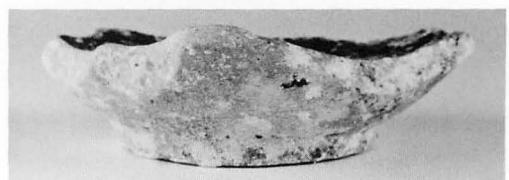
P - 63



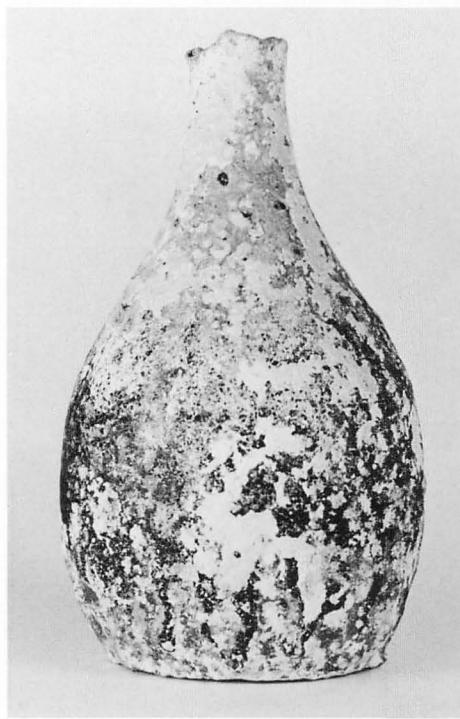
P - 62



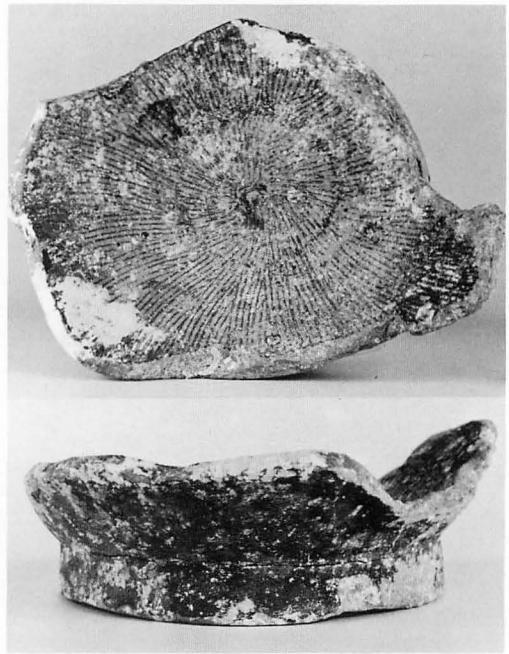
P - 64



P - 66



P - 68



P - 69